

---

# 願いよ…

鈴蘭

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

願いよ…

### 【Zマーク】

Z1162BA

### 【作者名】

鈴蘭

### 【あらすじ】

蘭ちゃんのせい…蘭ちゃんさえ…蘭ちゃんもえ…来なければ…

四人の転校生が来てから始まつた悪夢…

愛してしまつた…彼女を…

快斗をかえして！返してよおお！

もう、遅いんだよ、青子。諦めろ…

返してよおお！

青子と快斗のすれ違い。蘭を心から愛する快斗。快斗を心から愛する青子。

かなうことのない恋をする2人。

片思いする青子と快斗。

蘭は新一を新一は蘭を。両想いの蘭と新一。何もしていない蘭に青子が…

！？

「お前とは…単なる幼馴染だぜ？」

「私は好きなの…－快斗…大好き…－」

「青子ちゃん…ゴメンナサイ…・・・」

「蘭…愛してるよ…」

「新一…私もだよ?」

すれ違う関係。どうすることもできない4人。何が原因なのか、何が悪いのか…それすら分からなくなる青子。はたして4人の運命は

…！？

## 悪夢の始まり

「はじめまして、毛利蘭と…」

「工藤新一と…」

「富野志保…」

「…と鈴木園子です…！」

ここ、江古田高校2・Bの教室になんと四人の転校生が来たのであつた。

なぜ、四人の転校生がきたのかといふと、数日前のことであった。

「先生、私たちってどこの高校行くんですか？」

「ああ、学校見学の…確かに江古田高校2・B。一年間いるんだからな？」

「一年間もいるんですか！？」

「そうだ、おまえたち四人は仲がいいから特別に同じ高校にしてやつた。まあ、ほかのやつらよりはいい高校だから、ついていけるかが心配なだけだ。」

「大丈夫よ、こっちには工藤君がいるもの。」

「そうだな…」

「というわけで…」

四人が江古田高校に一年間の見学者としてきたということだった。

そのことを、江古田高校の2・Bの先生がクラスメートに細かいところまで説明した。

「じゃあ、自己紹介…まあ、趣味、入っていた部活動、得意なことを…毛利蘭さんから…」

先生が言うと、蘭は続けた。

「えつと…私の趣味は、家事、掃除で、入っていた部活は空手部です。一応主将でした。」

蘭の言葉に男子全員が意外そうに「ええええええ！？」といった。しかも、みんな細い手足。そして、趣味が家事と掃除。いかにも家庭的である。

「それと…得意なことも空手です。」

男子も女子も驚く一言。

「えつと、俺は…趣味は読書（推理物）、部活はサッカー。得意なことは推理、以上」

女子は一斉に「キャラーツ」と叫ぶ。

まあ、仕方ない。あの、高校生探偵工藤新一なのだから。

「私は薬を開発する（実験）、部活は科学部、得意なことは工藤君を実験台にすること。」

最後の言葉に皆、不審に思つたが別に気にしていない…。

「私は、新一君と蘭をからかうことが趣味で、部活はテニス部！得意なことも2人をからかうこと…」

女子も男子も園子の言葉に意味不明だったが、特にまた気にしていなかつた。

先生は一度咳払いし、四人が言った部活は江古田高校にすべてのいることを説明し、四人の席を指定した。

新一は隣なし。

園子は後ろから一番目の席。

志保は園子の右ななめ前。

そして蘭は…

あの、世界的マジシャンの息子、黒羽快斗の隣の席となつた。

(わ……ラッキー！)

快斗はそう思つたとたん、蘭は視線を感じた。

その視線の先には…

蘭そつくりの少女がいたのであつた。

悪夢の始まり（後書き）

感想待つてます！

## 挑戦状

休み時間になると、新一と蘭と志保と園子は一斉に一つにかたまつた。

「ねえ、私たちどんなことを観察すればいいわけ?」

「さあ……」

「まあ、一応クラスメートの団結力とか?」

「そんなところでいいんじゃない?」

四人の意見が決まったところに快斗が蘭の目の前にやってきた。

「ねえねえ、みんなは仲いいの?」

「うん! そうよ。一応、こっちの大馬鹿推理の介と園子は私の幼馴染。志保は転校してきたの。それで今では親友って感じよ?」

一通り言つと快斗は「ふうん……」といいながら新一をじろじろと見始めた。

「な、なんだよ……」

「いや、男一人で……」

「ああ、園子が女つて見えねーからな。」

「どういう意味よ、新一君! じゃあ、空手抜群の蘭はあ?」

「蘭はねえ……うーん、手ごわい女。」

「どう意味かな? 新一。」

ものすごい勢いで睨む蘭に新一は冷や汗をたらしながらすみませんと謝った。

蘭はクスッと無邪気に笑つて「よろしい」といつた。

そんな無邪気なところも新一と快斗にはかわいらしくと思つた。

「そうだ、俺は黒羽快斗。一応……」

ポンッと音を立てながら手から薔薇を出し、蘭に差し出す。

「マジック得意。よろしくな!」

「わあ、すごい!」

「へえ、すごいじゃん!」

「やるわね。」

女子たちは歓声をあげるが、新一だけがつまらなそうに快斗を見る。

いわゆる、快斗に嫉妬。

「ちゅうと、快斗、あんまり持てるからってねえ……」

そこには、蘭そっくりな少女が立っていた。

「ラ、蘭？」

園子が言つ。

しかし、どこか違う。

「いやちげえよ

「誰？」

「中森青子つていうの。快斗の幼馴染。」「へえー！」

蘭は興味ありげな顔をして聞く。  
「だれかにてるねー！」

青子を見て言つ蘭。

それにズケツと転ぶ新一と志保と園子と快斗。2人は自分にそつくりと思つていなかつた。

しかし、これは青子の挑戦状。

青子と蘭はいつたいどういう関係になつていいくのか…

それが、これから始まる悪夢だつた…

## 挑戦状（後書き）

今回短かつたんですが…

じつは、前回の小説で主将のことを私はキャプテンと言つていました。

じつは、主将のことをキャプテンとも「う」とあるんです。  
私、空手習ってるんだいろいろと知つてるんです。また、変なところがあつたら教えてください。感想待つてます！

## 止めるひとのやらない恋

(今日も快斗、顔が赤くなつてた…)

青子はそう思いながら、一人下校していた。後ろのほうには新一と蘭と園子と志保とそして快斗がいるのだった。  
もちろん、快斗は蘭の隣にいた。蘭は一応新一の隣だつたが、新一  
が快斗に嫉妬しまくつていたことは言うまでもない。

いつもは幼馴染の快斗と帰つていた登下校のこの道。  
たまに道草食つて遊んで毎日が楽しかった。

しかし、四人の転校生が来てから快斗は青子とではなく、青子にそ  
つくりの蘭を中心に戻るようになつた。

青子は教室の中でも親友の桃井恵子と小泉紅子としか話さなくなつ  
た。というより、快斗が話しかけてこないのであつた。

(蘭ちゃんにいつもべつたり…)

そう、蘭が快斗の目に現れてからだつた。  
こんなにも変わつてしまつた日常の原因は。

(蘭ちゃんの…蘭ちゃんさえ…蘭ちゃんさえ…来なければ…)  
悔しい思いをする青子。

それを知らない快斗と蘭。そして、ほか三人。

「なあ、蘭、今田の「J飯なんだ?」

(え?)

青子は後ろから黙ってきただに耳を傾けた。

「ああ、ハンバーグよ。」

(なんだ...上藤君か...やつこえは...上藤君と快斗って...やつくつ。)

今頃気づいた青子。

しかし、この際どうでもよかつた。

たとえそつくりでも、青子は快斗しか愛するひとはできない。

だからこそ、この恋はあきらめたくないのである。

(快斗が...失恋だったらここに...そしたら...青子のほうにも希望はあるよね? 蘭ちゃんさえになくなれば、快斗だつて諦めるよね?)

そう考えた時だった。

蘭たちや さわえこなくなれば

やつ思つた時、青子は最悪なことを計畫してしまつたのであつた。

蘭がいなくななる計畫を…

## 止めるひとのできない恋（後書き）

わあ～、青子ちゃんが悪人にいい！？  
誤字脱字、田だつたら「ermenナサイ」・・・！

## 計画実行

私の名前は中森青子！

江古田高校2・B、元気な明るい子です。

でも、今は明るくも元気でもない。

最低な、どん底に落ちていいる青子です。

そつ、青子は警部の娘ながら最悪なことを計画していつてこらの  
です。

だつて、悪いのは蘭ちゃんだもん。

蘭ちゃんさえ江古田高校に来なければ、青子はこんなこと計画しな  
かつたもの。

だから、悪魔を追つ払うの。

青子が正義の味方になるの。

青子が頑張りなくては快斗が悪魔に飲み込まれてしまつもの。  
快斗のためにも、青子のためにも頑張らなくちゃいけない。

警部の娘なのに？

最低？

それが何？

青子は正義のためにやつてるのよ……みんなどうかしてね。  
青子、つかまらないもん。

お父さんが警部だし。

青子は正しいとやつてるもの。

「青子ちゃんー。」

そらきた。

勝手にやつてへぬひぬれこ女。

むかつく女。

快斗を奪った女。

「何? あ、ちよつけじこせ。ちよつときでー。」

青子は無理矢理彼女を屋上へ連れてこく。

屋上へ着くと涼しい風が青子たちを見守るように吹いている。

さあ、ラストチャンス。

今からいう質問に青子が思つた通りにこたえてくれれば何もしない。  
違つていたら、その場で…

屋上から突き落とす。

「蘭ちゃん、今からこいつ質問なんだけど…」

「質問?」

「そう、質問ー。」

「なんの?」

「いいから。じゃあ、蘭ちゃんに好きな人はいますか?」

「え…」

「いるの? いないの?」

「い、いるかな…」

あ、そう…

つたく、

役立たず。

「その人はあなたの近くにいますか？」

「うん…いるよ…」

へえ…いるんだ…

快斗なんでしょ？

「その人は…誰ですか？」

素直に言つていいのよ？

ただし、回答によつては

あなたの命は

ないわよ?

「私の好きな人は…」

新  
一  
…

工藤新一だよ？」

え……？

工藤新一……？

高校生探偵の……快斗にそっくりな人。

その人が好きなんだ……

なんだ……なんだ……

そうだったの…なら…青子は蘭ちゃんの恋を応援すればいいんだ。

そして、工藤君と蘭ちゃんがけしかけたのを快斗が知る。  
諦めて、青子に振り向いてくれる…。

いい！それいい！

「ねえ、青子ちゃん、何のために質問？」

「ううん、青子も好きな人がいるの…」  
「…」  
なってないかなあー！って！

「あ、そうだつたんだ！で？青子ちゃんは誰が好きなの？」

「快斗だよ！小さいころか大好きなんだ！」

「へえ～私も。私も新一が小さいころから好き。こつも守ってくれて…新一は私のことどう思つてるのか分からなになどね…」

哀しい顔をする蘭ちゃん。

蘭ちゃんでもこんな顔をするんだ。

確かにそうだ。

蘭ちゃんって気の強そうな感じじゃない。

空手をやつてるって言つてたけど、すごく優しかった。  
だからこんなに悲しい顔をするんだ…

素直だから…

「蘭ちゃんー青子、蘭ちゃんの恋応援するー。」

「本当...?」

「うん！だから、蘭ちゃんも青子の恋応援してー。」

「うん！約束しようつー。」

青子、さつきまで殺氣が漂っていたのに今は蘭ちゃんの友達になつちやつたし……

なにやつてんだか、青子つたら。  
でも、聞いてよかつた。

あとから後悔するなんていやだもんね。

でも……やっぱり蘭ちゃんへの違和感は変わらないんだ。

なんか、このままじやいけない。  
もつともつと……

深い違和感がある……

蘭ちゃんと仲良くなつたらいけなによつな……

悪夢が待つてこるみづな…

私はそのまま、家に帰つて夜になつてベッドに入つて寝てしまつたら  
変な夢を見た。

すいじやな夢…

快斗が…快斗じやなー・・・

青子とは単なる幼馴染だよ

青子?あんな奴好きじやねーよ

蘭ちゃん…おれ、蘭ちゃんの「と繋いでいる…

付き合ってくれねーか?

なんで?なんで工藤なんだよー俺は…こんなにも蘭ちゃんを離してゐるのに…

蘭ちゃん、俺はあわいめなこよ?

蘭ちゃんと工藤が付き合つた?  
工藤が消えればいいんだな?

快斗しか出でこない夢。

嬉しいはずなのに、内容は最低だった。

まるで…これから出来事を予知しているかのよう…

## 計画実行（後書き）

感想お待ちしています！

## 夢が現実になる始まり

変な夢だつた。

責任は朝起きるとい、夢で見た、快斗が快斗じゃない夢を思ひ出しきいた。

責任を幼馴染としか見てなく、指しにほゞ蘭ちゃんを愛していた快斗。

田が合ひのない快斗。

夢の中でもやうなんだ…

現実でもやべ。

快斗は田を合わせてくれない。

いや、田はあつてるんだと思ひ。

でも、その田は蘭ちゃんへと向かつている。

責任を蘭ちゃんと勘違にしているよつた眼で見ている。

でも、すぐにわかつてしまつのだ…

だから、すぐに田をやらし、蘭ちゃんのほうへと向かつていく。

どひつて…？

幼馴染つて本当に思つてゐるんぢやないの？

本当に、单なるクラスメートつて思つてゐるんぢやないの？

ይ.፲፻፱፭

蘭ちゃんが来て……蘭ちゃんに一困ほれして……

そうして、電子を見なくなつた。

青子の存在は、快斗のなかにいるの？

快樂... 罷子は「んなにやねん...」と快樂の「ん」が好物なの!」

朝ご飯食べた？

お父さんに「行つてきます」つて言つたつけ？

比類問題 符か書子の頭に浮かひあかる

まあ、いいや。

ちよつとぐらこ……ちよつとぐらこ……じやない。

青子はそう思つて、蘭ちゃんのほうを無意識に見てしまつた。

10

信じてもいいんだよね？

青子は、蘭ちゃんを信じてる。

だから…恨みはない…よね？

なんだか不安が青子の中を渦巻いていた。

なんだろう…

これから嫌なことがあるやうな気がして…

そう思つてゐ時だった。

いきなり、蘭ちゃんがバタッと音を立てて倒れたのだった。

無理…してたんだ…！

真っ青な顔をして倒れる蘭ちゃん。

女子が悲鳴を上げる。

快斗は蘭ちゃんを抱き上げようとした時、素早く工藤君が蘭ちゃんを抱き上げた。

お姫様だつこわれてる蘭ちゃん…「ひやまし…」と言つたといふ  
だけど、そんなこと、考へる暇なんてない。

工藤君も青い顔をして蘭ちゃんを急いで保健室へ抱き上げながら工

つた。

蘭ちゃん…大丈夫かな…！

青子は蘭ちゃんの親友の園子ちゃんと面野さんを連れて保健室へ向かつた。

蘭ちゃんはさつきよりは顔が赤くなっていますやと寝ていた。

きれいな顔…

かわいらしい顔…

「新一君！蘭は？！」

あせる園子ちゃん。

青子もその答えが聞きたい。

「ああ、先生によると睡眠不足だよ。」

「変ね、蘭が睡眠不足なんて…」

「ゲームでもしてたんじゃないの？」

私の発言に三人は「ハア？」とも言いたそうな顔をした。

え？ち、ちがうの？

「何言ひてるのよ。蘭はゲームなんかしないわ。蘭がやるとこえれば家事と掃除、そして工藤君のお世話。あと…空手ね。」

あ、そななんだ…

そういえば、自己紹介の時いつてつたつけ。

そんな話しをして、ついに快斗が青子たちの目の前に現れた。三人がキッと睨むように快斗を見る。

まるで、「蘭が倒れたのはおまえのせいだ」とでもいふよな顔。青子は何も言えず、ただ黙つているだけだった。

「蘭ちゃんは…？」

「寝てるわよ、見てわからない？」

宮野さんの嫌みたつぶりない方に快斗が宮野さんを睨む。にらみ合つ工藤君と快斗、園子ちゃんと快斗、面黒さんと快斗。

青子はその場に居られなかつた。いることが許されるのだろうか？

青子は…

「この関係に入られることができるだらうか……？」

そつやつて睨みあつてゐるうちに蘭ちゃんが瞳を見せた。

きれいな澄んだ瞳は私たちを順に見ていく。

「あ……私……」

「蘭！」

一番最初に声を上げたのは工藤君だった。  
嬉しそうな甲高い声。

「新……園子……志保……青子ちゃん……黒羽君……」

順々にいつしていく蘭ちゃんは哀しげな表情だった。

「ごめんなさい……私……何してたんだろ……？」

「蘭はさつき倒れたんだよ……」

工藤君がベッドに寝ている蘭ちゃんに優しい声で言つ。

「そつか……ごめんね、迷惑かけちゃつて……」

心からそういうつていよいような顔で私たちに言つ。

そんな表情もかわいらしかつた。

「蘭、何で睡眠不足だつたのか、心当たりある？」

宮野さんが单刀直入に言つた。

青子は同感した。

早く聞きたい。

蘭ちゃんに何があつたんだろう？

「空手の東日本大会が近かつたの。だから、夜まで練習してたの。  
絶対優勝したかったから……」

熱心な蘭ちゃん……

きつとお父さんも知つてゐるんだらう、なんてよい娘なんだらう。

てね。

青子、蘭ちゃんのこと尊敬しちゃった。

「でも、蘭ちゃん…無理しちゃつたら余計迷惑だよ…次からはめちやんといつてよ?」

「まあ、いう人は、新一君にしてよ? 蘭を守れるのは騎士ナイトである新一君だけなんだから!」

「ちょっと、俺がいるじゃんか!」

快斗の声が保健室に響く。

青子も含めて五人が一斉に快斗を見る。

「え…何?」

「あんたに蘭は守れないわ!」

「蘭が守れるのはただ一人、工藤君だけよ?」

女子たちの攻撃が快斗に襲いかかる。

青子は

止めてあげたくない…

やへ、蘭ひやんのじとをあわいぬてほし…

やつ思い続けただけであった…

## 夢が現実になる始まり（後書き）

蘭ちゃんって本当に可愛いですね～！  
というわけで、感想待っています！

## 男の対立

「えー、みんな知つていてると思つが、一ヶ月後に学園祭がある。そこで、うちのクラスでは劇をやることになつた。それを知つていた鈴木がシナリオを書いてくれたんだ。まあ、完全なラブロマンスだがな……」

先生の言葉に園子は「へへ」と、新一と蘭は「またあ……？」と、志保は「フツ」と笑つただけだった。

クラスメートは嫌がつてゐる奴もいれば、まあいいんじゃないか、と言つてゐる奴がいた。

そんなクラスを先生が一回ほど手を叩くと、生徒たちはハッとして先生のほうを向く。

「いいか？いまから役を決める。自分のやりたいものに手を上げるんだ。じゃあ、委員長、副委員長、よろしく。」

先生がそう言つなり、自分の机へと戻つてしまつた。

委員長らがシナリオを見ながら黒板に登場人物を書いていく。と、シナリオを見ていると、いきなり、副委員長の顔が真つ赤になつた。

「どうかしたか、副委員長！」

「…キ、キスだつて…」

「ええええええええええええええ…？」

副委員長とともに先生も含めて生徒（新一、蘭、志保を除き）は一斉に園子を見た。

「え…ふつりでしょ？」「プロマンスよ？これくらいいいじゃない。」

と平然と言つ園子。

帝丹高校に者は園子の描くシナリオには必ず「キス」を入れる」と知つてゐる。

なので、いまさら驚いたつて仕方ない。

「あ、でも、本当にしないよ？」

園子はにやにやしながら新一と蘭を交互に見る。

そんな顔には「あんたたちが主役をやりなさい」とでもこいつだつた。

「そ、それで、皆さんはどの役をやりたいですか？」

委員長が改めていう。

みんな、主役以外のものに手を上げていく。

そして、主役がまだ決まりずにみんな黙つている時だった。

一つの手が上がる。

「はいっ！先生！私は蘭と新一君を提案します！…」

「はあ…？」

「あんたたち、まだ約決まつてなかつたよね…？」

にやつと笑う園子。

うつと言葉を失う新一と蘭。

「先生！俺の手も上がってるぜ？！」

「な、なんだね？」

「俺が主人公やるから、ヒロインを…

蘭ちゃんに！」

「ええええええええ…？？？」

園子、新一、蘭が同時に言つ。

快斗はキヨトンとして「く？」といった。

「あんたねえ！もう主人公は決まったのよ！？」

先生、蘭と新一君で決定です！！！文句ある人、手をあげて！」  
にらむ園子に誰も手を上げない。  
とこう」と…

主役一人は新一と蘭に決まってしまった。

「ちえ・・・俺と蘭ちゃんのほうがよかつたのに・・・隣の席なんだしさあ・・・」

快斗はつまらなそうにそっぽを向いた。

授業が始まると、快斗が蘭に話しかけ始める。

「ねえねえ蘭ちゃん、明日の家庭科でクッキー焼くんだよね？」

「ええ、そうだつたような…」

「なら俺にちょうだい！」

「でも・・・先客がいるの・・・」

「だれ?」

目を光らせる快斗。

まるで猫。

「新一よ。」

「ふう〜ん・・・蘭ちゃんは工藤が好きなの?」

「...」

蘭は黙ってしまった。

快斗はそれを見て何かあつたのかと思つた。

「なあ、今日カフュにでも行こつぜ?」

「え・・・?」

「いいからさ!ね?」

「う、うん...」

蘭は仕方なく承知してしまい、放課後、快斗と蘭はカフュについた。

「かわいいところね...!」

蘭は店の中をきょろきょろとみて席に着く。

「ねえねえ、それで?工藤と何かあつたの?」

「ううん・・・ただね、私の片思い。」

「え?片思い!?」

快斗は蘭の言葉に驚きを隠せず大声を出してしまった。

「ちょっと、声がでかいよ……！」

顔を赤くしながら言う蘭。そんな顔でもかわいいと思つてしまつ快斗。

「新一……なんかさ、最近私に冷たいの。『ご飯作りに行つても田を合わせてくれない』……」

蘭は悲しそうに話を続ける。

「私がいなくなればいいのかなあ……つて。しかも、主役になつちゃうし。」

「蘭ちゃん……」

二人がそんな会話をしている、一個後ろの席ではなんと、園子と志保と新一が聞いていた。

新一は蘭の言葉に顔を赤くしたり、悲しそうな顔をしたりしていた。

「それで？新一君。あんたたちは両思いついてことになるけど……」

「……うつせ・・・・」

「あなた、蘭のことが好きなら蘭は優しくしなくちゃ……」

園子と志保の攻撃に新一は顔を赤くしながらそっぽを向く。

「なんで冷たいのか、予想してみると…原因は黒羽君ね……」

「そうねえ…彼をどうにかしないとねえ、新一君。」

二人の予想はばっちりあたつていた。

新一は完全に快斗に嫉妬していたのである…

「あんたねえ、嫉妬するよりも、蘭にやれしゃして、蘭を黒羽君に渡したらダメ！」

園子の言葉は一生懸命応援するような声だった。

新一は「わかった」といつと、コーヒーを飲みながら一人をじっと観察して何かを考えていたのであった…

「それじゃあ、ありがとね、黒羽君。あ、おひるよ。」  
蘭が席を立つ。

「いって。おれがおひるから。じゃあね！」

蘭は「そつ…ごめん！」と言いながら店を出て行つた。  
三人は蘭の行動よりも快斗の行動をチェックしようと、快戸を尾行  
するのであつた…

快斗が人気のないところに行くと

「そろそろ、尾行やめたら?名探偵たち……」

といったのであった。

三人は気づかれたと思い、新一がサッと姿を現した。

「気付かれてたか……」

といった……

## 男の対立（後書き）

えっと、長くなりそうだったので後回し。  
感想待つてます！

## 夢の言葉

「気付かれたか…」

新一が茂みの中から快斗と顔を合わせる。  
お互い、目で戦つて引く暇もないような感じ。

志保も、園子も同時に茂みから出していく。

「なあ、蘭ちゃんから手を引けよ…」

「いやだね」

「俺はね、めちゃくちゃ蘭ちゃんを愛しちゃったんだよねえ」「どんなところが？」

「顔から性格まで。すべてだ」

「へえ…俺も全部だぜ？でも、おまえが知ってる蘭と俺が知ってる蘭とでは天秤に掛けるといつちのほうが重いぜ？しかも、俺のほうが蘭を知っている。」

冷静に言いあう男たち。

「あれ? ビリヒー! 聖子の家の前に?」

「へ?」

「あ、聖子ちゃん…?」

「中森さん…?」

「聖子…?」

そう、四人のいる場所は、青子の家であった。

青子は三人でいることに驚いていた。

「ねえ、どうかしたの？」

「単なる…」

「男の争いよ。」

あきれたように言う園子と志保。

何も知らない人ならば理解不能だが、青子はわかつていた。

すべて聞いていた。

先ほどの会話、すべてを。

たまたまスーパーの帰りに聞こえた、男の声。2人いることはすぐわかつただろう。

そして、顔を見ると、快斗と新一であった。という感じ。

(蘭ちゃん争い…か)

青子はそう思つて「そう、じゃあ、また明日！」と言つて家に帰つていつた。

「青子ちゃん…無理してたわね。」

「ええ、彼女にも気をつけたほうがいいわね…」

園子と志保が中森家を見上げながら言った。

そして、2人の言い合いが続いた。

「蘭は俺のもの！」

「いいや！俺のもの！」

「俺と蘭は両思いなの！」

「俺は彼女を振り向かせる！！！」

「そんなの無理だね！」

「やつてみなきや分かんねーさー」

「そうかな？！」

「何い！？」

2人の言い合いは、まだまだ続きそうだ…

そんな2人の言い合いを玄関のドアを背にして聞いている、青子が  
いた。

青子は快斗の言葉一つ一つが胸に突き刺さっていた。

青子は……もうこりない存在なのかな？

蘭ちゃんのせー……蘭ちゃんわたくし来なれば……  
返して……快斗を返して……返してよおお……

青子は言葉でできない想いを涙で表す」としかできない。

ふつむくことのない彼。

それでも、愛し続ける青子。

昔から好きな彼を、まだまだ愛し続ける青子。

言葉でできない想いを涙で表す」としかできない。

そのとき、ふとよみがえったのはあの、変な夢のことがった。

青子とは単なる幼馴染だよ  
青子？あんな奴好めじやねーよ

「やつひいえば、中森はどうなんだよ。」

「青子とは単なる幼馴染だよ。」

「本当かなあ？好きなんだろ？」

「青子？あんな奴好きじやねーよ。」

夢が言つた言葉が・・・

現実になつて行く時だつた  
…

夢の言葉（後書き）

ちょっと、後回しにしましたぁ…！

感想待つてますー。

## 思いを伝えて

青子は今日、工藤君を屋上に呼び出した。

放課後、夕日がきれいに見えてすゞくきれいだつた。

「ねえ、蘭ちゃんのこと好きなんでしょー? 早く告白したほうがいいよー!」

「へ?」

「蘭ちゃん、言つてたよ? 工藤君のこと、好きなんだつて、小っちゃいから好きなんだつて! 快斗に取られる前に... 工藤君がとつて、快斗の田を覚ませせて!...」

青子は一生懸命言つた。

そう、これは、蘭ちゃんの運命も青子の運命もかかってるの。

工藤君で変わる...

工藤君で変わるの...  
工藤君が蘭ちゃんに恋心さえすれば、快斗は青子に振り向いてくれる... -

青子はそう信じて、屋上を出て行つた。  
屋上から出ると、そこに蘭ちゃんがいた。

前もつて呼び出しておいた蘭ちゃん。  
なぜか悲しそうな表情。

「どうかした? 蘭ちゃん。」

「いや...ちょっと、最近新一冷たいからか... 何のことで呼び出され

たのか分からなくて……」

一応、工藤君が呼び出したつてことになつてゐるけど、工藤君は何も知らないの。

「そりやつてしまんぼりしてないでーきつとHAPPYになるよー。」

「本当?」

「うんうん!」

青子は自信を持つてた。  
でも、それは違つた。

確かに、初めはよかつた、作戦通りだつた。  
でも…その後が違つた…

青子はそつと、2人を見ていた。

「新一、何?話つて。」

「へ?俺呼び出してね ゼ?」

「え?でも、青子ちゃんが…」

あーあ、ちょっとすれ違つてる。  
まあいいか。

わかったと思う。工藤君のあの顔は…

(なるほど、中森がやつてくれたんだな)

あ、気持ちがわかつたのね！

よしよし、今すぐ出立よー。

「なあ……蘭。」

「ん？ 何？」

「あ……いや……」

つたく、度胸がない……

「もーつー男ならちやんと言ひなせこみーー。」

「へ？」

え？ もしかして眞づいてる！ ？ 「藤君の気持ち」

「事件で早退した時に習つた授業のノート見させてくれつてー。」

「はー。」

は  
い  
?

全く違うんですけど……

ていうか、どんだけ鈍感！？

いや、屋上とくれば告白ってわかるだろ?」など……

「あれ？違うかつた？」

「あ……いや……実はそ、うなんだよ！」

「アーティザン・プロジェクト」

卷之三

納得しきひつかの・

「んなわけねーだろー!?.」

「へ?」

よく言つた工藤君!

「俺が……言いたいのは……俺は、毛利蘭を愛して……一生守りたいです

…」

T  
^  
:  
?

へえ、新一私のこと愛し

蘭ちゃんが驚いて大声を上げた。

「な、なんだよ…」

顔真っ赤の工藤君と蘭ちゃん。

「本当に……？冗談でからかってるんじゃないよね？」

「あたりめーだろ？」

「じゃあ……私も……新一のこと愛しています……！」

よく言った、蘭ちゃん！

2人とも両想い！

青子はパチパチと拍手をしながら2人の前に現れた。

「おめでとう、2人ともー青子、感激しちゃった！」

「あ、青子ちゃんー？今の…見てたの？」

「もちのうんー！」

「ハア…」

2人してため息をつかないでよもぐ…

「じゃあ、キスしちゃえば？」

「はあー…？」

「青子、もう帰るからーじゃあねー！」

といつて、またドアのところに隠れて2人の様子を見る青子。

「蘭…愛してるよ…」

「新一…私もだよ？」

あ  
…

キスした  
…

深い深いキス。

青子も…快斗とそんなことしてみたい。

2人はキスをした後、

仲良く2人で帰つて行つた。

次の日だった。

事件が起きたのは  
：

## 思いを伝えて（後書き）

青子ちゃん、2人を見事くつつけましたあ！  
お見事！

でも、次の日、大変な事件が…！！  
感想待つてます！

## 悪魔の降臨

「蘭！よかつたね、両想いになつて！」

「え？え？」

「おめでとう、工藤君。」

「おめでとーー！工藤！」

「はい？」

次の日、新一と蘭が登校してくると、2人が両想いになつたことをなぜか知っていた・・・

実は・・・すべて青子が知らせたのであった。

まあ、園子と志保だけに話したのに、園子がクラス中にばらまいた、とでもいえば簡単だらう・・・

「快斗、おはようー！」

いつものように話しかけてみる青子。でも、快斗は答えようとしなかった。

「快斗？」

「工藤・・・」

なんと青子の予想だと、自分に振り向いてくれるはずが新一をすぐ怒っていたのであつた。

青子はやばいことになつたと思った瞬間だった。

快斗が新一に飛びかかったのであった。

「新一！あぶない！」

快斗の手にはカッターのような刃物を持っていた。

蘭が新一の前に立った時、

ズサツと音がした。

「蘭！」「蘭！」「蘭ちゃん！」「毛利！」「蘭！」「蘭！」「蘭！」「蘭！」

新一をかばった蘭が代わりにおなかを深く刺されたのであった。

蘭は血だらけのおなかを押さえる。

「蘭！今すぐ、保健…いや、とにかく、救急車よ！あと、先生にも連絡を！」

志保がみんなに命令する。

快斗が真っ青な顔をして蘭を見ていた。

「てめえ…蘭になんてこと…」

新一が快斗の胸ぐらをつかみいまに殴りそうな声で言つ。

「ら…蘭ちゃん…」

快斗はそれしか言えなかつた。

その言葉に新一は力チンと来た。

大きな音が教室に響く。

快斗の頬が赤くなっていた。

ぶつたのは…

新一じゃなく、

園子だった。

「あんたねえ……まず謝るのが先じゃないの……？」蘭がどれだけ痛がつてゐるか……わからないの……？  
あんたのせいだ……あんたのせいだ……！」

園子は怒りに震え、もう一度殴りそつた勢い。

と、その時、「やめて……もひいいから……私は、平氣。だから……わへ、誰かを責めるのはやめて……！」

苦しそうな顔をじつじつと見つめ、一生懸命叫びつづけた。

「蘭！しゃべるな……！」

「お願ひ……誰も……責めないで……！」

痛い…

それだけの感情が蘭を襲う。

「蘭…もういいから…」『めん…』

園子はそういうつて蘭の田の前に立つて、「もうちよつとで救急車来るから」と言つて励ます。

新一は怒りに震えるばかりだった。

「新一…怒るだけじゃ…何も進まないよ…？」

蘭の声は震えていても…

優しい声だった。

そんな声で、新一は一旦怒りを抑え、蘭とともに救急車へ乗つて行つた。

病院へ着くと、蘭は手術室へと運ばれた。

「工藤君、少しは落ち着いたら?」

手術室前をうろうろと歩く新一。

「これが落ち着いてられつか…」

「あたしだつて落ち着いてなんかいられないよ、志保。」

「そうね、蘭ですものね。」

三人はそれきり黙つてしまつ。

何も言うことのできない。

ただそれだけで、蘭を待ち続けていた。

「あ……！」

園子が声を出す。

手術中というランプが消えたのであった。

中から医者が出てきて

「もう大丈夫です！あとは入院して回復するのを待つだけですから

……」

医者の言葉に三人はホッとして、「よかつた」とつぶやいた。

「毛利さんはあと一時間後には目を覚ますでしょう。」

医者はそういって三人を後にした。

三人とも蘭のいる病室で静かに蘭の寝顔を見つめていた。

蘭は新一をかばった。

新一はすべて自分の責任と感じているようだった。

自分がもつとしつかりしていれば、こうなることはなかつた。

「蘭ちゃん！」

途中で青子が病室に駆け込んだ。

「あ、青子ちゃん！」

「蘭ちゃんは？」

「今寝てるよ…！ありがとね、来てくれて。

「青子だつて蘭ちゃんの友達だもんね！」

青子はにっこり笑つて病室を後にした。

でも、次に来た人に悪夢が遅いかかる。

## 悪魔の降臨（後書き）

次来た人って、誰なんでしょう…？

蘭ちゃん、よかつた…！回復できるようになつて。  
感想待つてます（^○^）／

## 男の悲鳴

「…黒羽…」

新一が小さなつぶやくような低い声で言った。

ドアを後ろにして立っている快斗。

快斗を睨む園子、志保、新一。

複雑な視線が快斗に向けられ、快とはいられるような状況ではなかつたが、持ち前のポーカーフェイスで焦りを隠していた。

「蘭ちゃんは？」

「手前えが刺したんだろ？自分で考えてみろよ。」

「そんなんじやわからねーな」

「なら担当の先生にでも聞きな。」

「ハツ、どうしても自分たちではいえねーよつ…」

「言えるわよ？」

声を出したの志保だった。

志保は冷静で相手を見下しているようだ表情で話を続けた。

「私たちにだつて口はあるんだから言えるにきまつてるじゃない…」

「あ、そう。で？蘭ちゃんはどうなの？」

「蘭の」と、気安くちゃん付けで呼ばないでくれる？

「なんで？」

「あなたが傷つけたんでしょう？蘭だって嫌がるはず…まあ、それ

はないとおもうけど。」

志保はいたつて冷静、しかし、その冷静さが怖い…

「蘭が一番傷つくの、知ってる？」

「？」

「新一君が死んじゃつたり、傷ついたり……そして、蘭のもとから姿を消すこと。つまり、黒羽君がやろひつとしたことはすべて、蘭が傷つくことなんだから……！」

園子も応戦する。

「俺はな、蘭に何かあつた時はな……やつたやつを探偵でも殺しに行く。特に蘭が死に至つた時は派手な殺し方だからな……」

「お、おい……今殺るわけねーよな？」

びくつきながら言つ快斗。

震えているのが一言でわかる。

その声を聞くと志保がハツとひらめいたように

「なら、新しい実験台にでもなる？」

「いいわね、それ……」

「いいな……！」

三人が不敵な笑みを浮かべる。

快斗はその瞬間とつかまつた瞬間、一階の叫びをあげた・・・

## 男の悲鳴（後書き）

ちょっと早い話でした  
タイムアップでしたあ  
感想待つてます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1162ba/>

---

願いよ…

2012年1月5日19時53分発行